Tsurezuregusa and Its Time ー A Review of Characters

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45258

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式　7（Form 7）

学　位　論　文　要　旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

『徒然草』とその時代―人物考証による再検討

（和訳または英訳）Japanese or English Translation

Tsurezuregusa and Its Time ― A Review of Characters

人間社会環境学　専　攻（Division）

氏　　名（Name）　上島　眞智子

主任指導教員氏名（Primary Supervisor）　西村　聡

（注）学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

『徒然草』とその時代―人物考証による再検討

Tsurezuregusa and Its Time ― A Review of Characters

上島眞智子

Abstract

This paper is aimed at manifesting Kenko's perspective on his time and the people around him based on historical records, and at deepening our appreciation of his work. Chapter 1 explores his time and community based on the 207th waka by Taira Koretoshi. In Chapter 2 the Joshin time and some relevant people are identified by scrutinizing the contents of "Junii Kinyo Kyujo," and the background of Nos. 65 and 66 of *the Kenko Hoshi Collection* is investigated. In Chapter 3 the medieval Japanese era-naming system, gengo, is examined. Moreover, the relationship between the questioner and the answerer in those days is investigated according to the interrogative expressions. Chapter 4 probes Tatsuaki's and Kageshige's stances on yokobue. Also, the sense of value in medieval bushi society is explored according to three stories on Hojo Tokiyori. Furthermore, through the route of wakas, the place he visited during his trip to Kanto is confirmed as Shomyoji Kanesawa Bunko. In Chapter 5 Kenko's friends and acquaintances are described based on the illustrated version. Chapter 6 focuses on Kenko's mental and physical changes to explore the reasons why Kenko discontinued Section 1 and rewrote Section 2. Chapter 7 traces Kenko's life as a waka-master and analyzes his state of mind. These investigations reveal that Kenko's objective of writing *Tsurezuregusa* was to describe the language and lifestyle of those people who lived in the Kamakura period, from his own critical viewpoint, with a precarious balance between aesthetics and practical science.

学位論文要旨

鎌倉時代末期、元弘の変前夜に成立した『徒然草』には、二百四十三段の断章に約二百三十人の人々を登場させ、無名の人や職能の人まで卓越した筆致で自由闊達に描いている。最も数多く描かれているのは鎌倉時代中期から後期の貴族であり、彼らは皇統迭立を初めとする複雑な時代に権力と交錯しながら生きていた。貴族に視点をおいて論じている先行研究は多くはない。

本論文では兼好の周縁の貴族に注目して史料をもとに詳細な人物考証をし、従来の説の再検討を試みた。その上で『徒然草』執筆の意図を明らかにすることを目的としたものである。第一章から第五章までは『徒然草』と『兼好法師集』に交錯する人物を取り上げ、第六章では中断と再執筆から成立論を試みた。第七章では兼好の後半生の動向を『兼好法師集』をもとに考察した。以下のとおりに研究をすすめた。

第一章「卜部兼好と周縁の人々―『兼好法師集』207 番これとしの朝臣の家にて　河を　を視座として」では、第一節と第二節では第百二十八段と第十段を取り上げて、土御門雅房の誹謗や後徳大寺の行

為への西行評に異なる情報の付加によって、一般的な見解に与しない兼好の論法を明示した。併せて従来から諸説ある第百二十八段の土御門雅房への讒言の時期と「院」について、史料をもとに先行研究とは異なる視点から考証し、天皇在位と雅房の官位、年齢の相関関係等によって、その時期を雅房の三十代、権大納言正二位時代、伏見天皇在位の永仁三年～永仁五年とする説を提示した。第三節から第六節は、兼好の初度の関東下向に関連して『兼好法師集』中、最も早い時期の歌の一つと想定される 207 番歌に注目して考察した。兼好が歌会に招かれた「これとしの朝臣」は平惟俊であり、惟俊は堀川基俊が後見人として関東に随行した久明将軍の乳父であることから、宮将軍宗尊親王の母系である平一族に着目した。宗尊親王の生母棟子が後嵯峨天皇の後宮に入ったことによって、正五位下木工頭平棟基の家系は、准后棟子を初め三人の宮将軍、四人の女院をその一族から送り出していること等を系図の作成によって明示した。四人の女院の全てが大覚寺等嫡流の後宮に入り、その中心に邦良親王母代となる宗尊親王女王で棟子孫の永嘉門院瑞子がいることや、その永嘉門院は堀川家出身であることなど、兼好が惟俊家の歌会に招かれた背景には平一族と永嘉門院、堀川家等の関係があったことを明らかにした。第七節では、具守の一周忌に兼好と贈答歌を交わした延政門院一条について、従来具守と延政門院一条の関係が不明とされてきたが、一条が仕えた延政門院悦子、棟子、永嘉門院瑞子、邦良親王と堀川家の一円の関係を示したことによって、一条の歌は兼好の歌友としての返歌のみではなく、生前の具守を知る一条個人としての悲しみの歌であることを明らかにした。

以上の考察から本章では、第百二十八段の土御門雅房への讒言の時期と院の特定を試み、その上で栄誉に拘る貴族の執念を明らかにした。又、後徳大寺家に対する西行の批判話をのせる『古今著聞集』と小坂殿の心遣いを加えた『徒然草』第十段と比較し、第百二十八段と第十段に新しい情報を付加した兼好の意図は、雅房と徳大寺の名誉回復が真意であると考えた。雅房の土御門家も徳大寺家も在俗中の兼好が関わっている家であり、批評精神にみる兼好の深層心理を考察した。又、『兼好法師集』207 番歌を視座として平一族と大覚寺統嫡流との後宮の関係を考察し、棟子と永嘉門院の影響力を示した。表象となる 207 番の歌の意味と、兼好の歌会への招きの背景との相関関係を考察したことによって、在俗中の兼好の動向の一端を具体的に明示することができた。

第二章「『兼好法師集』65・66 番と従二位公世卿状」では、第一節で『兼好法師集』の贈答歌中、公世との 65・66 番歌だけが故人に対してであること、『徒然草』第四十五段の冒頭に良覚僧正の兄弟として公世の名前が書かれているが、個性的な良覚に対して公世の言説や具体的な人間像について全く言及されていないこと等、取り上げ方の特異性から兼好の公世への関心に注目した。第二節では『徒然草』の先行研究でも取り上げられる事のなかった、公世の実像を如実に伝える「従位公世卿状」の内容について、宮内庁書陵部『伏見宮楽書集成』に翻刻されている上申書「従二位公世卿状」の内容に着目し、箏一流の正嫡者として箏統存続の使命と不遇の状態にある当時の公世の悲哀に満ちた胸中を確認した。第三節では『伏見宮楽書集成』に載せられている「解題」の所説と書状の本文を考究し、「前内府」「前内大臣」を共に花山院師継とし、上申の時期を師継の没年以降とする「解題」説に対して、『公卿補任』の公世の初叙爵の時期と父実俊に教えを受けた時期、書状の発端の「後嵯峨法王五十の御賀」の時期などを勘案し、「前内府」を花山院師継、「前内大臣」を御賀に頃に亡くなった大炊御門冬忠とし、上申の時期は師継の没後ではなく散位後である等の新たな説を提示した。「御遊抄」の公世の弾奏記録に見る師継と冬忠との関係等からもこの説を補足した。稿者の提示した説では上申の時期と公世の初叙爵との整合性も解決することができる。第四節と第五節では、公世が洞院実雄の猶子であったことに注目して、勅撰集に詠んだ良覚と公世兄弟の実雄家での歌等を取り上げ、親密な交流を示した。又、従来の研究では言及されていない洞院家と堀川家の母系関係を明示し、公世と兼好の共通の交友圏からも 65・66

番の贈答歌の背景を考察し、公世と兼好の接点を明らかにした。第六節では「従二位公世卿状」上申後の公世について考察し、公世が願った春宮への箏の伝授に関して、『花園天皇宸記』の公世が相伝していた箏譜に関する記事や、「公世卿状」の内容を想起させる天王寺の楽僧俊鏡の「絲竹口伝」を史料として示し、願いが叶わなかったことを明らかにした。第七節では第一節から第六節での考察をもとに、公世が比叡山霊山院で箏奏を奉納した時に、堂の柱に書き付けた 65 番歌の思いを兼好が受け止めて答えた 66 番の歌について、兼好の贈答歌の背景には「公世卿状」が伝える箏一道に生きた故公世への敬愛の情があったことを示した。

本章の考察で「公世卿状」に書かれている前内府を師継、前内大臣を冬忠とする説、上申の時期を師継散位後とする説の提示し、「公世卿状」や同様に公世の情報を伝える「絲竹口伝」、『花園天皇宸記』の箏譜の情報、洞院家・堀川家の母系関係等をもとに公世の生涯を照射したことによって、65・66 番の歌の理解が深まり、『兼好法師集』に残した兼好の思いを明確にすることができた。

第三章は『徒然草』第七十段を中心に考察した。　第一節から第四節では第七十段に書かれている「元応の清書堂の御遊」について先行研究を取り上げ、兼季への「意趣」と懐に続飯を入れている兼季の「用意周到」な行為との関係を先行研究や絵入版本の図像等から考察した。又、『徒然草』では使用することの少ない元号に注目して類例の章段を取り上げ、『徒然草』で使用されている元号が不穏な時代状況を暗示していることを考察した。第五節では作品中から第七十段と同じく含みを持たせた疑問の表現の類例を考察し、兼好の話題の人物を直接の疑問の対象とはしないで脇役にずらすことによって、対象との距離をはかり、疑問を増幅させている事を示した。

以上、第七十段の「意趣」について考察した結果、『徒然草』では少ない元号による書き出しは不穏な社会状況を暗示している事を示した。又、疑問の推量に取り上げられた人物の『徒然草』第二部における章段の記述順は、「御門の御位はいともかしこし」にはじまる第一段と同じ序列であることを確認し、同世代の貴顕に対するかつての宮廷役人兼好の内実を明らかにすることができた。

第四章「関東の記憶－北条時頼と四条家の一族」では、行宣法印の言説を取り上げた頓阿の『井蛙抄』と『徒然草』の比較し、兼好の音への感性を指摘した。第二百二十段の黄鐘調の鐘の声の考証、第二百十九段の四条隆資と兼好を介在とする豊原龍秋と大神景茂の横笛の奏法について、言談から言談に発展していく過程に兼好の音楽的造詣の深さを媒介としていることを示した。この段の四条隆資の一族に北条時頼の逸話に足利義氏の縁戚として座す隆弁がいる。又、兼好の関東下向時に直接聞いた大仏宣時の「昔語り」による北条時頼との思い出話の象徴とされている味噌について、先行研究では定説のように質素だけを強調されているが、当時の味噌は貴重であったことを示し、又、「つきたる」の清濁によって量のイメージが異なることを示し、従来の説との質的変化を提示した。又時頼に関する三話の時系列から、倹約についての時頼の変遷を捉えた。第六節は再度の関東下向の目的を『兼好法師集』72～80 番の地理的考察から北限は武蔵の国金沢であることを確定させた。第二百十六段の時頼話で足利義氏側に座している隆弁は四条隆資の一族であり、『徒然草』にはこの一族が連綿と描かれている事をはじめ、西園寺・洞院家との関わりも系図で示す事によって、隆弁が足利義氏の側にいる事の意味を明らかにした。

第五章「言説の方法と描かれた兼好」では、個性的な僧侶の言説の妙、出家後の仏道について自照、作品中の兼好自身を投影する段を『なぐさみ草』と家蔵の版本の図像による解釈と享受のあり方、直接経験で書かれた章段の人物、法師との交友関係など多角的な視点から兼好像を描出した。

第六章は「『徒然草』成立論における第一部中断と第二部再執筆の要因について」では、兼好の観念的思考の限界と『続千載和歌集』入集後の劇的な環境の変化など外的・内的から第一部中断の要因を捉

え、又、十年を経ての第二部再執筆の要因については、第一部にはほとんど記述されていない有職故実的章段を、第三十三段の玄輝門院の「閑院の櫛形の形状の記憶」から書き始めていることを、古きよき時代の精神への共感と捉え、更に、激動に向かっていく不穏な時代の変化を予測し、そうした様相と隔絶して、変わりゆく時代の及ばない時間の内に、亡くなった人々や心に残る言説と様相を書き記す内なる欲求があったことを第二部再執筆の要因としてあげた。

第七章は『兼好法師集』をもとに兼好の動向を五期に分けて辿り、歌人時代の兼好の心と環境の変化を考察した。『兼好法師集』には影響下にあったにも関わらず足利尊氏をはじめとする室町新勢力を意識的に捨象したとする先行研究の説を踏まえ、このことは元弘の変の前夜で擱筆した『徒然草』執筆の意図と重なることに言及した。

土御門雅房の讒言事件の時期と「院」の特定、207 番の平惟俊家での歌会に招かれた背景と永嘉門院、「従二位公世卿」の人物考証と上申の時期、洞院家と堀川家の母系関係、65・66 番歌と「公世卿状」との関係、元号の内包する不穏な時代の空気、中断と再執筆にみる兼好の要因等、本論文において先行研究と異なる視点から考証した結果、従来の研究で明らかにされていない成果を示すことができた。

兼好の時代は、公卿の京都朝廷と武士の鎌倉幕府の二元統治、持明院統と大覚寺統の両統迭立、「延慶両卿訴陳状」に見られる二条派と京極派の歌壇での反目などの二項対立の時代であり、兼好の社会的基盤はまさにそうした複雑な時代の状況に添っていた。『徒然草』は鎌倉中期以降元弘の乱の前夜までを俯瞰し、人々の言説や様相を表現者としての兼好の視点から洞察した書である。作品の中で権力と交錯しながら生き生きと描かれている兼好の同時代の貴族の大半は、『徒然草』成立時には亡くなっている。『徒然草』の擱筆はその貴族の時代の終焉を象徴する激動の前夜である。情報通で自讃にも見られるように勘のいい兼好である。時代の状況を明晰に推察していたであろう。この事は作品の執筆意図にも深く関連している。批判も含めて兼好が愛した鎌倉時代中期以降に生きた心に残る人物や関わった人々の、『徒然草』だけしか伝えていない言説や様相を、兼好自身の批評的視点も交えながら書きとどめることこそ、表現者兼好が『徒然草』を執筆した意図であったと結論したい。

学位論文審査報告書

平成２８年　２月　１日

１　論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専　攻　　人間社会環境学専攻

氏　名　　上島　眞智子

２　学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

『徒然草』とその時代――人物考証による再検討

３　審査結果

判　　定（いずれかに○印）　　○合 格　・　不合格

授与学位（いずれかに○印）　　博士（ 社会環境学・○文学・法学・経済学・学術 ）

４　学位論文審査委員

委員長　　西村　　聡　　㊞

委　員　　上田　　望

委　員　　志村　　恵

委　員　　杉山　欣也

委　員　　高山　知明

委　員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

５　論文審査の結果の要旨

本論文は『徒然草』及び『兼好法師集』を研究対象とし，両作品に名前の出る多数の人物の伝記的事実や兼好を含む人物どうしの関係を考証して，その結果から各段の読み取り方，『徒然草』の執筆意図，『兼好法師集』に見られる心境等に再検討を加え，従来の説を補正し更新しようとする論文である。この研究対象には，特に『徒然草』に関して，注釈書類を中心に近世以来膨大な研究の蓄積があり，新しい事実や解釈を呈示するのは容易でないと見られるが，本論文ではひるまず同時代の基本史料を広く集め，読み直して，各段の登場人物の家柄や兼好の仕えた家との関係，政治情勢や歌壇の動向などを詳細に把握することで，兼好の人物評価の姿勢，表現の朧化や元号明示の意味，そして第一部・第二部ともに親しい人々の死が『徒然草』執筆の契機となったことの指摘などを通して，従来とは異なる『徒然草』理解を示そうとし，その間の詠作（『兼好法師集』所収）を分析して心境の推移を丹念に追跡している。また，近世の『徒然草』版本を多数収集し，その挿絵や注釈者の各段理解を現代の研究水準にあえて対置させることで，思いがけない問題の発見につながり，『徒然草』研究を再活性化する可能性を持った視点を提供しているところも，今後の発展が期待される。併せて当該研究分野に貢献する内容を備えた論文であると評価できる。

第一章では，『徒然草』128 段の「雅房の大納言」について，その生き物に対する無慈悲な行いを見たとの讒言を用いて彼の評価を改め，彼の大将昇進を見送った「院」はだれか，その時期はいつかを考証する。従来，亀山院説・後宇多院説・伏見院説・後伏見院説が提起され，諸説行われて定説を見ない問題である。本論文では，この４代における大将任官時の官位と年齢を調査し，摂関家の出でない土御門雅房に大将昇進の機会があるとすれば権大納言正二位，かつ 30 歳代に絞り込まれることを明らかにした。それは永仁 3 年（1295）から永仁 5 年に相当し，伏見院の在位期であったことになる。さらに，本論文では，『増鏡』及び『徒然草』196 段等の諸記述から，土御門家にとって雅房の祖父顕定以来大将昇進が一族の悲願であることを浮かび上がらせ，『徒然草』128 段では雅房自身「才賢く、よき人」と評され，「院」も大将昇進を考えていたのに，昇進が実現しなかったのは「院の近習」が讒言したことによるが，兼好はそうした事情を知るからこそ雅房以外の名前を伏せて，讒言が事実無根であること，讒言とは別に「院」が慈悲心を大切にした人であることに重点を置いた書き方をしていると見ている。

もう一点，本論文では，第一章のタイトルに掲げられている『兼好法師集』202 番詞書の「こ

れとしの朝臣」について，同集 242 番詞書の「平貞直朝臣」を平宣時（『徒然草』215 段に出る）の孫，宗泰の子であること，「これとしの朝臣」は平惟俊であること，時期は嘉元 3 年（1305）以前であること，兼好が鎌倉に下向し平惟俊家の歌会に参加したのは嘉元 2 年頃であること，平惟俊の一族と兼好が仕える堀川具守家とは後宇多・後二条朝の近臣として立場を同じくしたことなどを明確にし，そうした背景に照らして兼好が鎌倉の平惟俊家の歌会に参加したことの意味，宗尊親王の娘永嘉門院，宗尊の妹延政門院と堀川具守の関係など，従来の研究では見通されてこなかった人物関係を解明している。

第二章では，『徒然草』45 段の「堀池の僧正」のことを「公世の二位の兄」として書き始め，『兼好法師集』でも比叡山横川の霊山院の堂の柱に書き付けた公世の歌を見つけた兼好が傍らに公世を慕う歌を書き添えたとあり，兼好にとって忘れがたい人物の一人である藤原公世について，従来翻刻資料の解題でしか言及されて来なかった「従二位公世卿状箏伝来の事」（以下「上申書」と略称）を再検討し，上申書中の①「前内府師」と②「前内大臣」，また③上申の時期につき，①と②は花山院師継，③は師継の没年以降とする通説に対して，②を大炊御門冬忠，③を師継の散位以降とする新説を提起した。その過程で生年不明の公世の生涯も次第に明らかになり，本論文では『徒然草』107 段に堀川具守とともに出る洞院実雄の猶子となったことに注目して，『徒然草』諸段及び『兼好法師集』の贈答歌等を読み直し，堀川家と洞院家の密接なつながりの中で兼好の公世に対する親近感が生まれていたことを指摘している。本論文では上申書が世間に知られ，兼好も内容を熟知していたと見ているが，兼好は公世や関係者と近い関係にあったからこそ，狭い世間の範囲でこの種の文書を知り得たとも言える。

第三章では，『徒然草』70 段の冒頭に「元応」（1319～1321），50 段の冒頭に「応長」（1311～1312），221 段の冒頭に「建治、弘安」（1275～1288）と，元号を明示して書き始める意図を考察している。70 段には，後醍醐天皇即位後の大嘗会で演奏されるべき琵琶の名器玄上は紛失中，これに代わる名器牧馬を演奏した西園寺兼季を陥れる陰謀のあったことが書かれている。50 段には，女が鬼となって伊勢の国から上洛し，都を騒がせた事件が書かれている。応長元年は天下に疫病が流行し延慶から改元されたばかりであったが，翌年早くも天変地異により正和へと改元される。鬼が向かった先の一つに西園寺実兼（兼季の父）邸があり，不穏な社会情勢を背景とするように見えるし，兼好自身程なく出家する時期に当たる。この両段に対して，221 段の「建治、弘安」の頃は兼好が生まれる前の時代であり，兼好は当時を知る老人たちか

ら話を聞いて，現代の風俗の過差（ぜいたく）を批判している。したがって 221 段の例はその元号が不穏な社会情勢の記憶を喚起させるわけではないが，過去のよき時代と対比することで兼好の生きる現代の負の側面に目を向けさせる働きをしている。各段切り離しての読み方としては特に新見とは言えないにしても，元号を明示する段や，「いかなる～かありけん」という表現を用いる段のまとまりに注目すると，確かに時代の空気感や兼好の姿勢がより鮮明になる。

第四章では，第一章でも言及した兼好若き日の関東下向とは別に出家後，再度関東に下向した事実を取り上げ，両度とも金沢文庫での書籍の閲覧や書写が兼好の学問的視野を広げたとする。そして書物による知識の獲得にとどまらず，北条時頼の逸話の取材源となった隆弁・大仏宣時らの伝記的事実やそれぞれの一族と兼好との関係を詳述し，再度の関東下向が兼好の後半生のスタートや『徒然草』の執筆にとって重要な行動であることを明らかにしている。

第五章では，近世における『徒然草』版本の挿絵を取り上げて，松永貞徳著の注釈書『なぐさみ草』の挿絵の影響力の大きさや兼好を痩身の老法師の姿で描くことの定着を確認している。挿絵をも含む近世の『徒然草』理解をどう活用するかは，今後の課題として発展を期待したい。

第六章では，『徒然草』の成立を 32 段までを第一部，以降を第二部とする説を支持し，第一部中断及び第二部執筆の要因を考察している。そして第一部を執筆する以前にすでに多くの登場人物が亡くなり，しかしその大部分は第二部になってから登場する人物であることは，出家後の自由と孤独がもたらした思索の結果であり，それは有職故実への関心の深まりとともに，古きよき時代への共感の表れであるとの見方を示している。中断については二条派歌壇内の事情に伴う歌人としての活動の多忙化に注目して，やはり本論文らしく人物関係を詳細に把握することで穏やかな推論の根拠を整備したと言える。第七章では，『兼好法師集』を根拠資料に兼好の後半生における心境の推移をたどり，実質的に本論文のまとめをなしている。

本論文は，このように明確な問題意識のもと，『徒然草』及び『兼好法師集』の全体を読み解き，基本史料を精査して人物考証に数多くの成果をあげ，文章表現上の不備・不統一も混じりはするが，『徒然草』とその時代を研究テーマに掲げて，まだこれだけの実証が可能であると気づかせてくれる労作である。関東の人々も含めて，『徒然草』にしか書かれていないことを兼好が書いた事情，書けた理由を，本論文は兼好の人物関係の中に探り当て，当代には失われた生の規範を彼らの言動に見いだそうとする兼好の姿勢や思索の跡を粘り強く論述した。よって審査員一同，博士（文学）の学位の水準に到達していることを認め，合格と判定する。